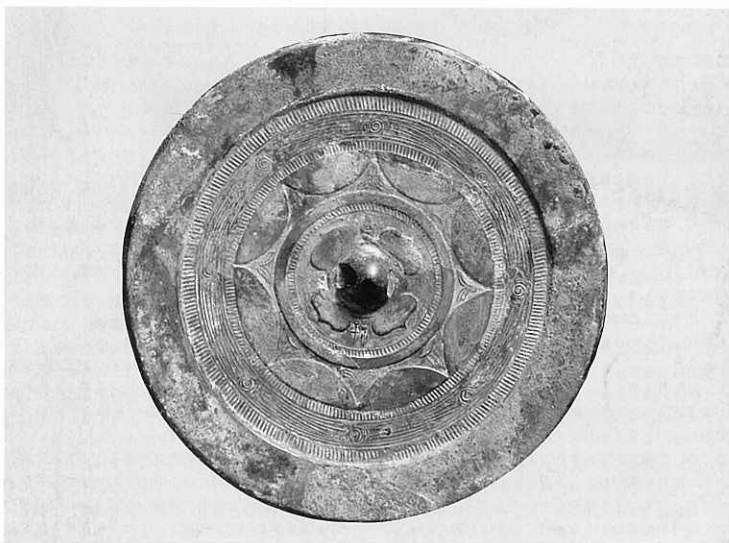


No. 100  
**佐賀県立博物館・美術館報**

佐賀市城内 1 丁目 15 番 23 号 TEL 0952 (24) 3 9 4 7 FAX 0952 (25) 7 0 0 6



しやうごうらんらいじんこもんきやう  
四葉座雲雷連弧文鏡

佐賀県上峰町一本谷遺跡出土

佐賀県立博物館蔵

1965 年上峰町坊所的一本谷遺跡で発見された箱式石棺の内部から出土したものである。出土時には数片に割れて、鏡体の一部が欠失しているが、現在完形に復元されている。径 17.0cm で、重さ 425g を計る。

鈕の周りには四葉座が廻り、その間に「宜」・「孫」の 2 字と「子」の一部が見える。この鏡式に通用の「長宜子孫（長く子孫に宜しからん）」とい

う吉祥銘が配されていたものと思われる。

この種の雲雷連弧文鏡は中国の後漢代前半（1 世紀頃）に盛行したもので、我が国ではやや遅れて弥生時代後期中頃から古墳時代前期（2～4 世紀）に出土する。ただし、弥生時代における完形鏡の出土は少なく、その点で本鏡は希少例に属する。1990 年佐賀県重要文化財に指定されている。

## 目次

- 四葉座雲雷連弧文鏡……………表紙  
○紙上展覧会「弥生のロマン—倭人の原像を求めて」……………P 2～8

## 誌上展覧会

平成4年度佐賀県立博物館企画展

# 弥生のロマン —倭人の原像を求めて—

主催 佐賀県立博物館  
会期 平成5年2月10日(水)～平成5年3月14日(日)  
会場 佐賀県立博物館

開催にあたって

約2千年前の弥生時代の人々ほどのような生活を送っていたかを理解してもらうことであります。つまり、吉野ケ里遺跡が特別史跡に指定されたことや、国営歴史公園に指定されることを願ったものであり、県民として吉野ケ里遺跡を理解してもらうことにこの展覧会の狙いがあったのです。

さて、考古資料は私達の先輩が日常に使用したもので何も難しい言葉や文字を使つての展示ではなく「資料の用途」は現代風に表現し、使われた時代も西暦で表示しました。観覧者の脳裡に存在する事象と対比することによって、より身近かなものにとらえられるでしょうから。

## 1. 弥生の自然

唐津地方の地形的外観は上場域は現代とほとんど変わらないと考えられます。下場域は西唐津から玉島にかけて砂丘が形成されており、町田川・松浦川がその流れを塞がれて、現圃場面のほとんどが沼状地であつて葦や菰が繁茂していたと考えられます。弥生時代の圃場は小さな谷口に限定されたでしょう。

佐賀地方は地図に示したように、河川の自然堤防・扇状地・そして有明海の造陸作用などが互いに作用しあつて複雑な地形をつくりだしています。

つまり、佐賀市東部・南部、神埼郡南、三根、北

茂安町の処々にみられる微高地がそれであつて、「島」の名が附せられている場合が多いようです。

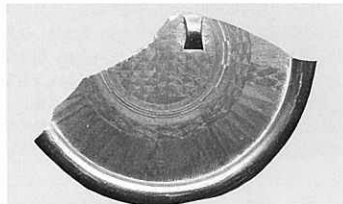
佐賀の動物を見ると、イノシシ・シカ・ウマ・ウシ・ノウサギ・サル・イヌ・タヌキ・キジ・カモ・ガン・ハト、コイ・フナ・ムツゴロウ・ワラスボ・サバ・カツオ・マダイ・アジ・イサキ、スミノエガキ・アカニシ・テングニシ・アサリ・シオフキ・ウミタケ・タイラギなどが生息していました。

植物にはムクノキ・クスノキ・ヤブツバキ、食用植物はイネ・アワ・シソ・モモなどが繁茂していたと考えられます。

## 2. 弥生の胎動

吾が国に水稲耕作が開始されたのは紀元前5世紀の頃とされ、佐賀県茶畑遺跡が最古と考えられています。この頃に福岡県曲田・板付遺跡などが稲作の遺跡として知られています。

この稲作文化は、中国南部の揚子江下流域に端を発した水稲(日本型)は、中国を北上して山東半島を経て朝鮮無文土器時代前期(紀元前7～5世紀)ごろ朝鮮半島中部に伝播し、それが紀元前5世紀には忠清南道の松菊里遺跡を形成し、同じ頃玄界を渡り玄界沿岸に、有明海沿岸に伝播されたのです。この米づくり文化の受容は、弥生文化の基礎づくりが



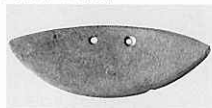
多鈕細文鏡 朝鮮民主主義人民共和国平壤出土  
東京国立博物館



磨製石剣 朝鮮半島出土  
下段はいずれも京都大学文学部博物館



丹塗摩研小壺 伝大韓民国普州出土  
佐賀県教育委員会



石包丁 朝鮮半島出土



平縁獸帯鏡  
中国出土  
京都大学文学部博物館



五銖銭 中国遼寧省北 賀泉 中国遼寧省熊岳城  
沙河北岸墓基 付近出土

なされたものであり、第1次大陸文化の受容であります。

第2次大陸文化の受容は、朝鮮の青銅器の伝播でしょう。紀元前2世紀を契機に銅鏡（多鈕細文鏡）や武器（銅剣・銅戈・銅鉞）、腕飾り（円環形の銅釧）などが、当時盛行した甕棺墓への副葬品として現れ、唐津市宇木汲田遺跡が標示されます。また、朝鮮系土器が召来されるものもこの頃であります。福岡県諸岡・三国丘陵遺跡、佐賀県土生・津留遺跡などに標示されます。

紀元前後頃から墳墓への副葬品に中国製の銅鏡や鉄製武器が現れます。これは第3次大陸文化の受容として受けとめられるでしょう。

第2次大陸文化の受容は、生産用具が石器から青銅器に替ったことは生産の拡大へつながった。また武器が青銅器への変化は戦闘のスピード化を意味した。

更に、第3次大陸文化の導入は、生産用具が鉄製品に替っていったことは益々生産性を拡大していった。また武器が鉄器化していったことも戦闘力の強化につながっていったでしょう。

また、中国王朝から金印や銅鏡を授かったことは彼の自分が中国王朝から保証されている証にはかならなかったでしょう。従って、銅鏡と鉄の刃は伝家の宝刀であったのです。

我が弥生文化の生成から展開する中で、大陸文化——朝鮮・中国の影響がいかに大きく且つ、強力であったかを類推することができます。

### 3、四季のくらし

大陸文化の受入は同時に血液の混合を意味した。佐賀平野を含めた北九州型弥生人は顔径（長さ）が高く、鼻の付け根付近が扁平で、平均身長は男性160cm、女性150cmあるらしい。

弥生時代は紀元前5世紀頃から3世紀にわたると考えられている。弥生文化は、1 水稻農耕が開始されたこと、2 青銅器や鉄器などの金属器が使用されたこと、3 朝鮮や中国の大陸文化の影響を受けていることでしょう。

弥生人は農耕に適した谷あいや、低湿地に10～20アールの圃場を開き、そこに水路をつくった。農具には樅木でつくった鋤・鋤が使われた。収穫には石廂丁で稲穂を摘みとり、木臼に入れて杵でつき脱穀精米し蒸して食べた。食膳には季節ごとの採集した食用植物、魚貝類、そして狩猟した動物のたんばくを摂取したのです。

道具を造る工具には、木を伐す石斧、大きく削る扁平片刃石斧に柄をつけて使用した。紀元前2世紀頃から紀元前後にかけて金属でできた斧・刀



平鋸 佐賀県土生遺跡  
三日月町教育委員会



銅鏃  
大阪府亀井遺跡  
大阪文化財センター

石鏝と土鏝  
大阪府池上・曾根遺跡  
大阪府教育委員会

子など登場し、製品も精巧なものが造られるようになった。

青銅器も最初は輸入されたが、鑄造技術もほとんど同時期に伝播されたい。佐賀には鳥栖市安永田・本行遺跡、神埼の吉野ケ里遺跡、佐賀市樫ノ木・鍋島本村南遺跡、三日月町土生遺跡、唐津市大深田遺跡などいち早く鑄造が行われていることが分かる。

布が織機（弥生機）で織られるようになった。繊維植物の栽培とともに絹織物も中国製と国産が存在するらしい。織物の巾は30cm程度で長さは自由で着物に必要な長さに合わせたい。縫い合わせてどんなデザインの服であったろうか。

装身具には、玉を連ねた首飾りと、腕飾りに代表される。玉は硬玉製の勾玉・碧玉製の管玉そして、ガラス製勾玉・管玉（唐津市宇木汲田・吉野ケ里遺跡）があり、輸入品と国産品があります。腕輪は貝製品を基本とし、ゴホウラ・イモガイを加工して用いています。貝輪を模した銅釦もあります。

墳墓には、支石墓・甕棺墓・土壇墓・石棺墓があります。



上 木製黒漆杓子  
下 木製篋  
ともに佐賀県土生遺跡 三日月町教育委員会



銅戈鏃型  
佐賀県樫ノ木遺跡  
東京国立博物館



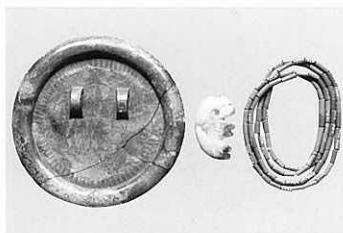
縦巻具か布巻具  
大阪府瓜生堂遺跡  
大阪文化財センター

#### 4. 弥生王墓の系譜

中国の歴史書『漢書』地理誌によれば紀元前1世紀頃には倭人の社会には百余りの「国」があったと記されています。それが『魏志』倭人伝の記す3世紀頃には30ほどの「国」に統合され、4世紀以降の古墳時代にはヤマト政権を中心とする一つの連合国家にまで成長します。このコーナーでは弥生社会が次第に階級的様相を帯び、「国」として認識されるような政治的まとまりにまで成長していったことを、北部九州の族長たちの墓やその副葬品の変遷を通して見ていきます。

全体を四つの段階に分けることができますが、まず最初は佐賀県唐津市宇木汲田遺跡や福岡県福岡市吉武高木遺跡に代表される段階です。紀元前2世紀後半から紀元前1世紀前半頃ですが、集団墓地を構成するいくつかのグループの一つに多鈕細文鏡や細形銅剣・細形銅矛・細形銅戈・円環形銅釦など朝鮮系青銅器を副葬した墓が集中して現れてきます。ムラの中において族長を中心とする集団が力を得てきた様子を示しているのでしょうか。しかしこの段階では族長集団内部において特定の墓に副葬品が集中することは希で、一つの棺には一つの武器が副葬される分散所有の形態が一般的です。

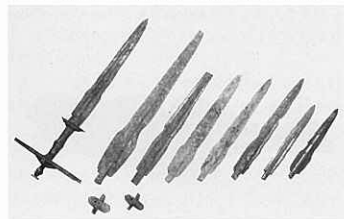
紀元前1世紀前半から中頃になると次第に族長集団墓の独立化が促進され、地下に列状に埋葬される



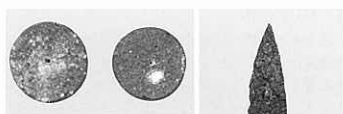
多鈕細文鏡・硬玉製勾玉・碧玉製管玉  
福岡県吉武高木遺跡 文化庁

一般成員の墓とは明らかに分離され、彼らだけが葬られる古墳のような墳丘墓地が地上に形成されるようになります。佐賀県神埼郡吉野ヶ里遺跡や福岡県福岡市吉武種渡遺跡がその代表です。しかし、副葬品の所有形態は依然として分散所有型で、品目も細形銅剣など朝鮮系青銅器が主体ですが、後半には中国系の小型銅鏡なども出てきます。

ところが紀元前1世紀後半から1世紀全般になると一般成員墓はもちろん族長集団の墳丘墓地からも隔絶した位置に大きな石の墓標を持つような特定個人の甕棺墓が出現します。福岡県春日市須玖岡本遺跡や福岡県前原市三雲南小路遺跡の甕棺墓がそれです。副葬品としては30面以上の前漢鏡やガラス璧・金銅製の棺金具など中国系の文物が圧倒的多数を占めるようになります。これらの文物は、彼らが朝鮮半島北部に設置されていた前漢王朝の出先機関楽浪郡を通じて中国皇帝に朝貢し、その見返りとして下賜されたものと思われる。時代はやや下りますが、「後漢書」には紀元57年に倭の奴国王が朝貢し、光武帝から印綬を与えられたことが記されています。福岡県福岡市の志賀島から江戸時代の天明4年(1784)に発見された「漢委奴国王」と刻まれた金印こ



細形銅剣・中細形銅剣・把頭飾 佐賀県吉野ヶ里遺跡  
文化庁・佐賀県教育委員会



ガラス製壁加工円板



連環文「日光」銘鏡

鉄戈

3点とも福岡県東小田峯遺跡 夜須町教育委員会

まさにその現物であり、当時の倭に中国皇帝から「王」として認められる人物がいたことを何よりも雄弁に物語ってくれます。文献には見えませんが、おそらく紀元前1世紀後半の須玖岡本遺跡や三雲南小路遺跡の被葬者も、それぞれ奴国や伊都国の王として前漢王朝から認められた人物だったのでしょう。

1世紀中頃以降になると北部九州に栄えた甕棺文化は衰退の傾向を見せ始め、大形墳丘墓地の造営などは認められなくなります。突き抜けた個人墓は少なくなり、副葬品は鏡が前漢鏡から後漢鏡に代わる他、巴形銅器や貝輪の形をした銅鏡など儀器的性格をもつ倭人のオリジナル青銅製品が加わります。福岡県前原市井原鏡溝遺跡、平原遺跡など伊都国の王墓にだけ多量の後漢鏡が集中する傾向があり、北部九州の盟主が奴国から伊都国に移った可能性があります。しかし、その伊都国も3世紀には女王卑弥呼の率いる邪馬台国連合の台頭の中で、時代の波に飲み込まれていったようです。



巴形銅器

佐賀県榑馬場遺跡

佐賀県立博物館

## 5. 祈りの世界

①人々の生活の発露にはいくつかある。その一つの場合が「祈る」と云う宗教的生活です。社会概念から導き出されるものとして「願望」と「感謝」がであろう。春の苗代づくりは秋の収穫を祈りながら種子を蒔いた。年月のうちに個人の祈りから集団（ムラ）の共通した祈りの行為——祭が定型化された春の祭として定着していったと推察されます。同じように夏・秋祭など季節祭として定着していったものと思われまふ。このように農業祭は祈願に発した祭であるが、一面に感謝祭が附されていることも忘れてはならない。

また、卜骨・刻骨を用いた宗教行為も祈願祭の範疇に入るでしょう。

自然「マツリをする」為には集うところの区域の設定が必要です。カミを運ぶと云う鳥の木型をつくり、数箇所に立った。この範囲内は神聖な地域で、この鳥型こそが鳥居の始まりであろう。この神域にカミが留まる家が建てられるようになります。所謂神殿の建立である。鳥取県稲吉・奈良県唐古鍵遺跡の絵画土器がこのことを如実に表現しています。

一方国の為政者の国づくりの祭は基本的には農耕祭であつたらう。それに加えられたのが国土の平安と隆盛を祈願し、国土の拡大を祈願したであろう。国土の拡大は武力行使が最たるものでしょう。従つ

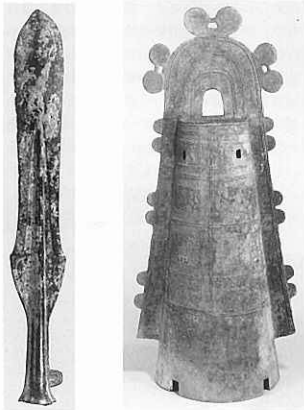


家を描いた土器  
(複製) 唐古  
鍵遺跡 田原  
本町教育委員会

て、武器を以て祭の対象としたであろう。戦士となったムラの若者たちは2派に分かれて模擬戦闘を行い、自国の勝利を奉納したと考えられます。この時使用された武器は、前代の最新鋭武器であつた青銅製の剣であり、鉾であり、戈であつたのです。模擬戦闘の奉納のあと、どれも共通して人里はなれた山中の傾斜面にこれの武器は埋納されていることは、何を意味しようか。

銅鐸は当初、音を出す祭具から国王を標示する概念をもつ銅鐸に変化したのではないだろうか。それは武器型祭器と同等の地位を得ているからでしょう。

②死者を送る際の祭があります。魏志倭人伝に「死ぬと埋葬のための棺はあつても柩は無く、土盛をして家をつくる」と。遺骸は甕棺や石棺にまつた。丹塗りの精巧な土器に五穀を盛り、酒を献じて感謝の意を表した。そして祭器の投棄がなされて祭りは終了するのです。



ひろしげどうぶく  
広形銅矛  
長崎県クビル遺跡  
ともに東京国立博物館

さいこうぶんくわ  
袈裟袴文銅鐸  
和歌山県西本庄遺跡



鳥形木製品 大阪府池上・曾根遺跡  
大阪府教育委員会

## 6. 器の美

このコーナーでは弥生土器と木器の美しいものを選びすぐって展示します。土器は関東・東海・近畿・九州の各地方のものをグループで展示しています。縄文を充填した華麗な山形文と円形浮文を持つ関東の久ヶ原式、白い器壁に紅殻の濃い赤と精緻な菊描文を持つ優美な東海の山中式、薄い器壁と繊細な篋状文に技術の確かさを窺わせる近畿の畿内第Ⅲ様式、そして洗練された面の美しさを追及した九州の須玖式と、一口に弥生土器と言っても様々なお国柄を見ることが出来ます。個々の土器の持つ美しさとともに、その集合が醸し出す各様式独自の気風とを併せて観賞していただければと思います。

一方弥生時代には鉄製木工具や木工用の横軸ロクロの発明などにより木器の製作技術も大いに向上しました。従来からの刳物の他に挽物が登場し、組合せ式の高杯などに優れた作品が次々と生み出されました。挽物・刳物とも木肌の美しさを生かしたものの他に、赤や黒の漆で艶やかに装飾されたものも多く、我々の想像以上に弥生時代の人々の生活も彩りに富んでいたことが窺われます。



丹塗山形文の壺  
神奈川県浦島山  
横浜市立本町小  
学校



脚の細い大型高杯（複製）  
大阪府四ツ池遺跡  
大阪府立弥生文化博物館



高い脚の盛鉢  
山口県宮ヶ久保遺跡  
山口県埋蔵文化財センター

## 弥生の森

弥生人の生活をより実像にせまることを意図した展示を試みた。「弥生人の四季」の暮らしを大形パネル（縦1.8×横7.2m）に農耕の図・折り・葬式など絵で標示した。パネル前面に沿って甕棺を編年のに配し裸展示とした。吉野ヶ里遺跡の地形・堅穴住居・族长級の高床式住居・物見やぐらなど3分の1模型を配した。これらは観覧者により一層の臨場感を与えたようでありました。

また、中国の銅鏡（唐津市桜馬場遺跡・模造）と銅鐸（高根県荒神谷・佐賀県永安田遺跡模造）を叩いて音色を聞いていただく。観覧者の興味をひくであろうことは実証されました。「普通鏡は絵や文字の面ばかり見せるよう展示されるのでどうして鏡なんだらうという疑問が今設けました」と云う中年の婦人の述懐でした。



「弥生の森」展示風景

## 展覧会を終えて

「弥生のロマン」展は3月14日迄の29日間の会期を終えた。この間8,181名の入観者を記録した。成人6,006名・大学生310名・高校生718名・小中学生1,123名でした。小中高生が約4分の1の23%を占めたことに希望がもたれる。高校生以下は観覧料免除の制の効果であろうか。市内の高校生は日本史の授業に観覧しているのが目立った。

展示資料は観覧ストーリーに沿って完形であることを原則とし、それに話題性のあるもの(鳥取県稲吉角田・奈良県唐古鍵遺跡の絵画土器、佐賀土生遺跡の青銅製地の銚型など)とした。展示に当っては文字パネルはできるだけさげ絵・写真に重点をおいた。題箋(9.5×6.5cm)に小中学生向きと一般向きのタイトルを掲げ理解し易さに努めた。観覧者が展示資料に能動的に働きかけられる場——銅鐸(複製)を鳴らす。銅鐸に自分の姿を写して見るなど観覧者の感興が通じてくるようでした。最も気を使ったのがタイトル「弥生のロマン」でした。県民の皆さんに理解と期待が抱かれるような字句を配したものです。展覧会の公報については6ヶ月前に「話題性のある「弥生のロマン」」を紹介(毎日)し、会期に入ると夕方と晩に5分づつ4夜連続で放映(NHK)、また(佐賀)新聞1頁にカラー写真と解説など報道機関の協力を得ました。

この様にわかり易く、楽しみながら展覧できる展覧会を意図したものでした。

## 講演会

会期中、展覧会の内容をより深く理解していただくために、2回の講演会を開催しましたが、いずれも定員を上回る盛況ぶり、大変好評でした。

2月13日(土)「紀元前4・5世紀の東アジア」

講師 九州大学文学部教授 西谷 正先生

3月6日(土)「青銅器が語る弥生の国々」

講師 福岡大学文学部教授 小田富士雄先生



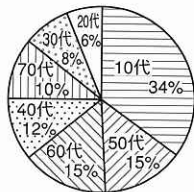
小田富士雄先生講演風景

## 会場アンケートから

会期中の2月20日(土)に展覧会場においてアンケート調査を行ったところ、183人の方に御回答いただきましたので、その結果の一部を紹介してみたいと思います。

### 1. 回答者の内訳

- (1) 性別 183人中  
 男性 114人(62%) 女性 69人(38%)  
 (2) 年齢



- (3) 居住地域  
 県内 56% (うち64%が佐賀市)  
 県外 44% (うち76%が福岡県)

### 2. 展覧会の感想 回答者 132人

- |                         |     |
|-------------------------|-----|
| (1) 感動的・とても良かった         | 30人 |
| (2) 楽しかった・良かった          | 20人 |
| (3) 良く理解でき・勉強になった       | 11人 |
| (4) 展示品が豊富で良かった         | 7人  |
| (5) 金印は本物を見たかった         | 6人  |
| (6) 系統的な展示で良かった         | 5人  |
| (7) 本物を見て良かった           | 5人  |
| (8) 説明が不足している           | 4人  |
| (9) 照明がやや暗く、見にくいところがあった | 3人  |
| (10) 復元品が多く、残念であった      | 3人  |
| (11) 説明が解りにくい           | 3人  |
| (12) 説明が平易で良かった         | 2人  |
| (13) 鏡や銅鐸にふれる企画が良かった    | 2人  |
| (14) ビデオが解りやすく、良かった     | 2人  |
| (15) その他                | 29人 |

感想としては「よかった」という感想が全体の7割近くを占め、担当者としてはホッとする反面、説明や照明に対する不満も見られ、今後の反省材料となりました。やはり本物志向は根強いようですが、復元鏡や復元銅鐸を使っただけの展示も好評のようです。

アンケートへのご協力ありがとうございました。

佐賀県立博物館・美術館報 第100号  
 編集発行 佐賀県立博物館・美術館  
 〒840 佐賀市内1-15-23  
 印刷 鹿島印刷株式会社

平成5年3月31日